

TruPhase の活用(22)
—音源の位相確認(22)—

1. はじめに

TruPhase の位相反転機能を利用して音源の位相確認を行っていますが、前報(21)に引き続き CD の位相確認を行います。

2. TruPhase の位相反転機能による音源の位相確認計画

前報(8)と同様、前報(1)と同じ経路で CD の位相確認を行いつつ、バッハの CD を聴いていきます。

CD ドライブ→fidata HFAS1-S10→Brooklyn DAC+→TruPhase
→300B シングルアンプ

試聴した CD 音源は、バッハの作品で下記のとおりです。

SONY SICC 1860

J.S.Bach チェロソナタ 1 番 2 番 3 番

パブロ・カザルス (チェロ)

パウル・バウムガルトナー (ピアノ)

MEISTER MUSIC MM1064

J.S.Bach シャコンヌ他

La Quatina

PHILIPS PHCP 1806

J.S.Bach トッカータとフーガニ短調他

チェロアンサンブルサイトウ

SONY SRCR 2536

J.S.Bach Goldberg 変奏曲他

ヨー・ヨー・マ (チェロ)

トン・コープマン指揮アムステルダムバロック管弦楽団

3. TruPhase の位相反転機能による音源の位相確認結果

上記 CD について、Brooklyn DAC+での位相反転と TruPhase での位相反転の結果が同じになるかどうか焦点です。

音量調整を容易にするため、Brooklyn DAC+では位相反転させず、TruPhase で位相反転させた状態で TruPhase のボリュームを固定し、TruPhase での位相反転では、Brooklyn DAC+でのボリュームでの調整だけにしました。

そして、Brooklyn DAC+では位相反転させないで、TruPhase での位相反転有り無しで聴いていきます。

パブロ・カザルス&パウル・バウムガルトナーのチェロソナタ盤は、1950年のモノラル録音ですが、位相反転させますと、チェロとピアノが中央に定位し、モノラルながら味わい深い演奏であることが分ります。位相反転させないと定位が曖昧になります。

La Quatina によるチェロアンサンブル盤は、位相反転させますと、4台のチェロの音がちやごちやになりますが、位相反転させないときちんと分かれて、旋律の受け渡しが分かりやすくなります。

チェロアンサンブルサイトウによるチェロアンサンブル盤は、位相反転させますと、16台のチェロのアンサンブルのまとまりがつきにくくなりますが、位相反転させないとアンサンブルらしくまとまって、主旋律と伴奏の区別がつきやすくなります。

ヨー・ヨー・マとトン・コープマン指揮アムステルダムバロック管弦楽団によるチェロアンサンブル盤は、位相反転させますと、定位が曖昧で、チェロの音像が過大になりバロックアンサンブルもとりとめのない音になります。位相反転させないとまとまったアンサンブルの前にチェロが定位します。

4. まとめ

カザルス&パウル・バウムガルトナーのチェロソナタ盤は逆相であり、その他の3盤とも正相であることが分りました。

以上